

紅茶の沿革と歴史

1 茶樹と喫茶の文化の始まり

(1) 茶の始まり

茶樹は永年性の常緑樹で、椿ツバキの仲間である。その多くは、アジアの照葉樹林帯(暖温帯)に広く分布している。この茶樹の原産地については、19世紀の前半に北東インド・アッサム地方の奥地で自生する茶樹が発見されたことなどから、いろいろな学説が発表されたが、現在では『中国・雲南省の西南部を中心とする山間地域である』とする一元説がもっとも有力である。

中国に伝わる神話によれば、「茶樹の発見とそ

の利用(文化)の始まり」は、今からおよそ四千年前(紀元前2734年)にさかのぼるといふ。主人公の「炎天神農」は農業の神で「神農」(シエンナン)の俗称があり、葉草の神、火の神となった半人半獣の想像上の人物である。また、彼は「本草学」(漢方)の始祖としてあがめられ、日夜山野を歩き、「一日に百草(多くの野生の植物)をなめて、72の毒に当たり、そのたびごとに茶の葉で毒を取り除いた」と伝えられる(この伝説は茶の葉に自然と含まれるタンニン的一种「カテキン類」の解毒・浄化作用を発見したことを暗示している)。

伝説とは離れて、周代の紀元前1600〜1588年頃に埋葬された、長沙「馬王堆西漢の墓」が発掘され、木札に文字などを書き記した「木簡」の埋蔵食品リストが発見された。そのなかに「茶」と比定される「價カ」という文字が記載されていた。

このことから、前漢の頃より中国・湖南省の長沙地区では、すでに「茶」が利用されており、埋葬品として取り扱われるまでになっていたことが推定されている。

また、四川省に伝わる紀元前59年当時の下男などの使用人（または奴隸）の雇用契約書である『僮約』にはじめて「茶」（タ・ダ。「にが菜」の意。古書では茶の字の前につけて使用された）の古文字がみられる。つまり、この人物の仕事のなかには「茶を買いに行く仕事」、「茶を煮る仕事」などが含まれるという記述である。

茶の利用の形態として考えられるのは、1) 最初は樹に生えている生の茶の葉をそのままで噛んだり、しがんだりしたものである。それはとても生臭く、とても渋苦いだけのものであったに違いない。そこで、次には、2) 茶樹の葉を集めて蒸し

たり、煮たりした調理された葉を食べてみたのであろう。それからさらに進化して、3) 茶の葉を蒸してから、漬けこんで（乳酸）発酵させ、それを噛んだり食べたり（湿った食品）、4) 茶樹の枝ごと切り取ってきて火に炙ってから枝ごと湯につけて、色や味のある茶湯を飲んだ（乾燥した食品）、などであったろう。とりわけ、最初の『喫茶の原形』としては、『羹（あつもの）』の一種が考えられている。いってみれば「野菜スープ」のようなもので、沸かした湯の中で茶葉を煮る方法（Boiling・ポイリング）と、今一つは、茶の葉の上から単に湯を注ぐ方法（Brewing・ブリューイング）の2通りの工夫があった、と考えられる。

茶の葉の利用のなかで、原始的な工夫の跡が残っている実例としては、次のようなものがある。

・中国雲南省に伝わるタイ族の「ニイエン」（発

酵させた嘸み茶)

・タイ北部に伝わる「ミエン」(発酵させた苦味のある食品)

・ミヤンマー(ビルマ)北部に伝わる「ラペソウ」(発酵させたおやつとの和えもの)

・ミヤンマー北部・シャン州のパラウン族に伝わる「碁石茶」(発酵茶を臼でひいて、餅状に仕上げる)

・右の類似品で、高知県大豊村の「碁石茶」、徳島県の「阿波番茶」など

中国・唐の時代に「茶は塩とともに交換経済社会の最古で最大の担い手」であった。

そして、唐の中期には茶の消費が中国国内各地に拡大し、地方長官による「課税」の対象となった。『唐代の抹茶』の法はいわゆる「煮茶」(煎茶法)

の一種で、釜の中で箸を使ってかき回して点てたものだが、『宋代の抹茶』は茶碗の中で茶筴ちやせんを使って点てるようになった(わが国の「茶道」はこの伝統を今日まで保持してきた)。

唐代以降になると、「茶を飲む」という風習が次第に近隣の諸国にも広がっていった。これには回教(イスラム教)を信ずる「アラブ人」や「蒙古人」たちの貢献が大きい。茶は最初に中国から陸路で蒙古に伝わった(茶馬の交易は有名)。その後、チベット、モンゴル、シベリア、カシミアへと伝わり、ここから中央アジアを経てアラブ諸国とコーカサス地方へ、さらには北アフリカへと蒙古人の馬蹄の及ぶ国々へと伝えられ、むろん後年にはロシアへも伝えられた。

中国からわが国に茶が伝えられたのは、聖徳太子が摂政となった西暦593年頃とされる。これ

は、仏教文化が中国から伝来したことがきっかけとなった。わが国での文献上の最初は『公事根源』で、西暦729年に聖武天皇が皇居の庭に多数の僧侶たちを集めて、読経の後で中国伝来の茶を彼らに与えた、とされるものである。また、桓武帝の782年に、帰国僧「行賀」が茶を伝え喫茶が始まったとする新説（日経新聞）もある。

西暦800年に入り、遣唐使の最澄（伝教大師）や空海（弘法大師）らが、中国から茶の種子を持ち帰ったとの説もある。しかし、815年に、滋賀県大津・梵釈寺の大僧で在唐35年の『都永忠』が、自ら点てた茶を嵯峨天皇に献上した後、これを貴とされた天皇の御命を受けて、近畿地方で茶樹の栽培を始め、毎年天皇に献上した、と伝えられる（『日本後記』『類聚国史』）。当時の茶は固形茶を砕くか、または削り、粉（抹茶）を湯で煮だ

し、甘葛^{あまずら}、厚朴^{ほほ}、シヨウガなどの甘味香料を加えて飲んだ。

わが国での喫茶の流行にもっとも貢献したのは「栄西禅師」（1141～1215年）であろう。叡山で修行の後、天台の教義よりも座禅の修行に強く惹かれて渡宋し、50日後に帰国。密教の一派「葉上派」の開祖となった。1186年に再び渡宋し、1191年に帰国。このときに彼が禅宗とともに持ち帰ったのが、宋の禅寺の儀式と「抹茶の法」であった。彼は茶の種子を九州の佐賀県神崎郡背振山（標高1055m）に蒔いた。この地で育った茶は「石上茶^{いわがみちや}」と呼ばれ、その茶樹の一部は博多の聖福寺に移植された。栄西はそこで、採れた茶の種子を京都・梅尾^{とがのお}の高山寺の「明恵^{みょうえ}」に贈った。これが後の『梅尾の本茶』として有名となり、後年になって「宇治の地」に移植された。

1214年、栄西は二日酔いで頭痛のひどい將軍・源実朝に茶を勧め、同時に茶の徳を称えるわが国最初の古典『喫茶養生記』を著し、將軍に献上し、わが国の茶祖と崇められる。内容は人体の生理と喫茶、病気の種類と養生法、茶の名称・効能、茶摘みの季節と摘み方、などである。

(2) 「茶」の語源・発音の始まり

茶の語源は、中国貴州省の苗族が、茶のことを「Tsuu・ta(ツァ・タ)」と呼んでいたことに由来する(第2章1(2)参照)。したがって、世界各地への伝播にも次の2つの流れがみられる(周説)。

- ・ポルトガル人・Cha……広東省澳門や九州の平戸などの方言を採用。
- ・オランダ人・Te……福建省廈門から地方の方言を採用・伝播。

茶の消費量が上昇傾向に向かった1750年頃のイギリスでは、一般にCHAとTEAまたはTEAを併用していたようだ。そして、19世紀の後半になっても、「インド帰りのエリートの証し」として彼らだけが「CHA」の言葉を使ったという。

(3) 紅茶の誕生

① 茶の分類について

茶は、ツバキ属、ツバキ科の常緑性植物の新芽や若葉を主な原料として造られる世界的な飲料である。つまり、同じ茶の樹の生葉なまはを使って、紅茶、緑茶、そして、ウーロン茶などを自由に造ることができると。したがって「紅茶の木」や「緑茶の木」というものが別々にあるのではなく、紅茶の場合はインドやスリランカ、アフリカなどで、その土地の土質や気候風土に適った紅茶向きの品種の茶樹を選